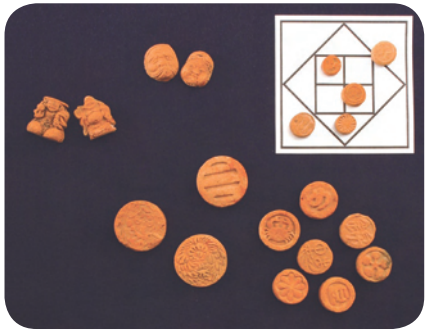
【江戸時代の遊び道具】

出土した飯事道具
（左の竈は、高さ７cm です）

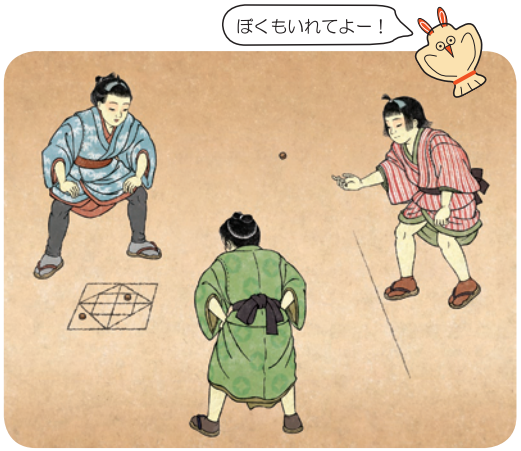
雑司が谷遺跡では、食器類などの生活に使われた道具の他に、玩具類も多く出土しています。これは、江戸時代になると、庶民も子どもに玩具を買い与えるようになるからです。人形などの他に、かまどや鍋などの生活用品を、精巧に模した飯事道具など、出土する玩具の種類は様々です。この中には泥面子というものがあります。円盤状に作られた泥面子には、様々な模様があり、家紋、動植物などのモチーフが見られます。また大きさも大中小と様々なものが出土しています。

江戸時代の子ども達は、これらの玩具でどのような遊びをしたのでしょうか。いつの時代でも子ども達にとっての遊びのひとつは、大人を真似ることでした。

女の子達は、飯事遊びから大人の女性の嗜みを学びました。また泥面子のルーツは、大人が行っていた賭け事がはじまりで、もともとは、銭を投げて勝ち負けを競うものでした。これを見た子ども達が、木の実や貝などで真似て、それが、銭の形により近い、泥面子になったと言われています。これらの遊びには、子ども達によって独自のルールや遊び方があり、江戸のあちらこちらに広まっていたと考えられています。



江戸時代の玩具（泥面子と芥子面）



泥面子遊び「きず」を楽しむ子どもたち（再現）

泥面子は、的に投げ入れたりして、遊びました。

雑司が谷まちかど遺跡ミュージアム
「出土遺物からみた江戸時代のくらし」
2013 年 6 月 29 日発行

編　　集：NPO 法人**としま遺跡調査会**
HP：http://www.toshima.iseki.org/
発　　行：雑司が谷案内処
資 料 提 供：豊島区教育委員会

雑司が谷まちかど遺跡ミュージアム

出土遺物からみた江戸時代のくらし

はじめに

豊島区では、1988年に遺跡の本格的な発掘調査が始まり、現在区内には、16の遺跡が登録されています。雑司が谷案内処周辺は、雑司が谷遺跡として、豊島区No.12遺跡に指定されており、1991年以降発掘調査が数多く行われ、今なお、地中には遺跡が眠っています。

雑司が谷遺跡では、旧石器時代から、昭和時代までの遺構や遺物が発見されています。特に、鬼子母神参道沿いには、参拝客を目当てとした、料理屋や茶屋などの店が並んでおり、賑わいを見せていました。これまでに行われた発掘調査では、江戸時代の料理屋や茶屋に関連する遺構や出土遺物が、数多く発見されています。

雑司が谷には、寺社参詣に訪れた人や、これらの人々をもてなす人以外にも、この地で生活を営む人々もいました。本展では、出土した遺物を通して、江戸時代の庶民のくらしをご紹介いたします。

雑司が谷遺跡の範囲と都営地下鉄副都心線雑司が谷駅地区の空撮

ぼくはすすきみみずくのスズミンだよ。江戸時代のくらしって、今と違うのかな？

角兵衛獅子のカクベイです。今回は江戸時代の雑司が谷のくらしについて、ご紹介します。

【江戸時代の飲食器】

江戸時代の食事に使う食器類は、武士や農民など身分によって、様々な品質や種類のものを、使いわけていました。展示した資料は、主に東京メトロ副都心線雑司が谷駅建設に先立って行われた発掘調査で出土したものです。江戸時代後期（18世紀後半から19世紀前半）の遺物で、庶民の普段の食膳を再現したものです。

江戸時代の食膳（再現）

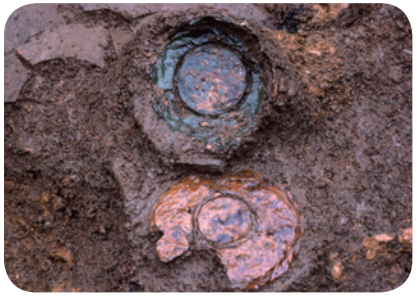
当時の風俗を描いた絵画資料などからは、江戸時代の庶民の食生活を知ることができます。一人に対して、一つのお膳が用意され、飯碗と汁椀の他に、皿、小鉢などおかずを入れる食器が基本の形でした。またお祝い事（ハレの日）などや宴会を行う時には、別に用意された大皿に料理が盛られ、お酒なども飲まれました。

当時の江戸では、食事は朝、昼、晩と三食とり、飯は、朝に炊かれました。また汁も朝に作られました。昼には野菜や魚などを一品増やし、夕食は香の物で茶漬けを食べていました（※『守貞謾稿』より）。

発掘調査の成果で出土した食器類に、どんな料理が盛りつけられていたのかは、遺跡の出土資料だけでは、窺うことは困難です。しかし食べ物のごみと考えられる、貝殻や魚骨などが出土することから、どのような物を食べていたのかその一端を、知ることができます。

『守貞謾稿』は、天保８(1837)年に起稿された、喜田川守貞による、江戸時代の風俗などをまとめた書物です。

『教草女房形気』（1846 ～ 1868 年）
（山東京山『帝国文庫第 40 校訂続気質全集』博文館 1896 年）



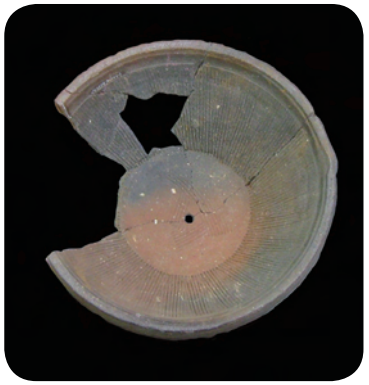
出土した漆器

あーっ！お椀の形で、漆が残っているよ!!

【江戸時代の生活用具】

現代に生きる私たちの生活では、便利な道具が多く使われています。江戸時代には、電化製品こそありませんが、使いやすいように、工夫を凝らした様々な道具が使われていました。展示した出土遺物の中には、今はもう使われていないものと、形を変えずに、現在も使われているものがあります。

まず擂鉢は、食べ物を擂り潰す道具です。現代でも使われていて、基本的な形は江戸時代のものと、変わりありませんが、材質や大きさなどが違います。



出土した擂鉢（堺産）

また火入れ・煙管・灰落しを見てみましょう。この三点は江戸時代の喫煙具です。火入れは、火種を入れておくものです。この火種で、煙管に詰めた煙草に火を着けます。一服した後、煙草の灰は、灰落しに捨てます。火入れと灰落しは、現在で言うところの、ライターと灰皿ということになります。現代とは形が異なりますが、煙草を吸う人にとっては、今も昔も変わらず、必要なものでした。

擂鉢には孔が穿けられていました。植木鉢などに転用されたのでしょうか。

火入れは、灰を入れて、火種を絶やさない様にしました。火入れと灰落しを兼用する場合もあったようです。

江戸時代の喫煙具
（左：姫だるま形の火入れ、中：煙管、右：火入れを転用した灰落し）

江戸時代の喫煙は、金属（真鍮や銅など）製の煙管を使ったんだよ。煙草の灰を捨てる時は、灰落しの縁に、煙管を打ち付けるんだよ。だから縁は欠けてしまうんだね。